

モーセの五書を読み解く

第4回聖書フォーラムキャンプ

基調メッセージ



メッセージ：中川健一

ハーベスト・タイム・ミニストリーズ

「モーセの五書を読み解く」

中川健一

はじめに

- (1) 第4回「再臨待望聖会」でのメッセージ
 - ①「モーセの五書が指し示す福音」(セツ・ポステル師→エレス・ソレフ師)
 - ②この内容は、イスラエル聖書大学では共有されている考え方である。
 - ③メシアニックジューの出現によって、教会全体が祝されている。
 - ④物語の「構成上の戦略」(the narrative strategy)を重視する考え方
 - *この手法を体系的に紹介したのは、John H. Sailhamer 教授である。
 - *元トリニティ神学校教授、現ゴールドengeイト・バプテスト神学校教授
 - ・著書:「The Pentateuch As Narrative」(Zondervan, 1995 年)
- (2) 物語の「構成上の戦略」を重視する利点
 - ①自由主義神学や文書批評学からの攻撃
 - *モーセの五書は複数のソース(資料)を用いて編集されたものである。
 - *複数の著者がいる。
 - *啓示された神のことばではなく、人間の作品である。
 - ②福音派の神学の見解
 - *モーセの五書には、明らかな構成上の意図がある。
 - *従って、著者はひとりである。
 - *モーセの五書は、神の靈感を受けて書かれた啓示の書である。
- (3) 用語の確認
 - ①モーセの五書
 - *創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記
 - ②モーセの五書を「トーラー」と言う。
 - *トーラーとは、「教え」「教理」のこと(律法という訳は、最善ではない)。
 - *狭義に解釈すると、モーセの五書。
 - *広義に解釈すると、律法(ユダヤ教の律法)のこと。
 - *どちらの意味であるかは、文脈で判断する。
- (4) トーラーは、ひとりの著者が書いた、まとまりのあるひとつの書である。
 - ①それを5つに区分すると、重要なメッセージが見えなくなる。

- ②創世記は、シナイ契約と土地の征服まで継続して読んで初めて意味が出て来る。
 - ③出エジプト記を創世記から切り離して読むと、どうなるか。
 - *最初に出て来る創造物語とシナイ契約との関係が分からなくなる。
 - *幕屋がエデンの園への回帰であるという著者の意図が分からなくなる。
 - *紅海を渡る物語が、洪水物語の再記述であることが分からなくなる。
 - ・洪水物語は、神の裁きと贖いの物語である。
 - ④レビ記、民数記、申命記に出て来る律法は、物語の文脈の中で読む必要がある。
 - *特定の律法がその箇所に出て来る背景には、文脈上の理由がある。
 - ⑤十戒は出 20 章と申 5 章に出て来るが、これは単なる繰り返しではない。
- (5) トーラーは、出エジプト体験をした世代の後の世代のために書かれた。
- ①聖書は神からのラブレターであるというのは、正しい。
 - ②と同時に、聖書の各書は、ある特定の読者を想定して書かれている。
- (6) アウトライン
- メッセージ 1
- ①トーラーは、1 冊の本である。
 - ②トーラーの著者は、モーセである。
- メッセージ 2
- ③トーラーには、明確な執筆目的がある。
 - ④トーラーには、明確な「構成上の戦略」がある。
- メッセージ 3
- ⑤トーラーは、メシアの到来と新約を指し示している。

Ⅰ. トーラーは、1 冊の本である。

1. 聖書の証言

(1) 旧約聖書

①2 歴 25 : 4

「モーセの書、律法に記されているところに従い、」(新共同訳)

「as it is written in the Law in the Book of Moses,」(KJV)

②2 歴 35 : 12

③エズ 6 : 18

「モーセの書にしるされているとおりである」

「as it is written in the Book of Moses.」(KJV)

④ネヘ 13 : 1

(2) 新約聖書

①マコ 12：26

「それに、死人がよみがえることについては、モーセの書にある柴の個所で、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んでいないのですか。『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります」

②ヨハ 5：47

③2 コリ 3：15

2. 5つに分割された経緯

(1) 英語で「Pentateuch」

①ギリシア語で「pentáteuchos」（5つの器〈巻物を入れる箱〉という意味）

②ラテン語で「Pentateuchus」

③紀元2世紀にはこの言葉が使われていた。

(2) トーラーの5区分は、早くから知られていた。

①ヨセフス（紀元37～100年頃）

②フィロン（前20～紀元50年頃）

③七十人訳聖書（ギリシア語訳）の頃から始まったのであろう（前3世紀）。

*現在の七十人訳聖書は、トーラーは5区分になっている。

*オリジナルがどうなっていたかは分からない。

*羊皮紙の巻物に書いていたので、区分が必要であった。

3. 著者はひとりである。

(1) 著者は、ある意図をもってトーラーを書いた。

①その意図を発見することが、読者である私たちの役割である。

②解釈学の目的は、著者の意図を発見することにある。

(2) 2重著者について

①聖書のすべての書の真の著者は、神である。

「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です」（2テモ 3：16）

②しかし、実際に文字に記したのは人間の著者である。

*彼らは、聖霊の導きによって啓示の書を記した（2ペテ 1：21）。

*人間の著者の経験、能力、特徴などが用いられた。

*靈感とは、書かれた結果に誤りがなかったことを保証する言葉である。

③神の意図と人間の著者の意図は、合致する。

II. トーラーの著者は、モーセである。

1. モーセが著者だという根拠

- (1) トーラーには、著者が誰であるかは記されていない。
 - ①著者は、それまでに存在していた種々の文書を編集した。
*ルカも同様の方法を採用した（ルカ 1：1～4）。
 - ②トーラーは、匿名の著者による物語として読まれるべきである。
- (2) しかし、ユダヤ教の伝統も新約聖書も、モーセが著者だとしている。
 - ①ヨハ 5：46
「もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです」
 - ②マタ 8：4、19：7、8、22：24 など、多数

2. モーセという人物の背景

- (1) 彼がこの書を書いたのは、出エジプトからカナン征服までの間の時期である。
 - ①彼は、イスラエルをひとつの国として作り上げるために、努力していた。
- (2) 彼が召命を受けた時、イスラエルはエジプトで奴隷となっていた。
 - ①出 1：8～14
- (3) 時が満ちたとき、神はイスラエルの民の叫び声を聞かれた。
「それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエル人は労役にうめき、わめいた。彼らの労役の叫びは神に届いた。神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた」（出 2：23～24）
 - ①モーセの人生と族長たちの人生とが、結び付いた。
 - ②両者を結び付ける絆は、アブラハム契約である。
- (4) アブラハム契約の 3 つの条項
 - ①子孫の約束
 - ②土地の約束
 - ③祝福の約束（イスラエルの民だけでなく、全人類に与えられる祝福）
- (5) アブラハム契約は、神がイスラエルの民を取り扱う際の土台となっている。
 - ①出エジプトの出来事についても、同じことが言える。
 - ②アブラハム契約は、シナイ契約とそれ以前の神の約束を結ぶ絆である。
 - ③さらに、シナイ契約と新約の約束（エレ 31：31～34）を結ぶ絆である。

*新約の約束は、キリストの死と復活によって成就した（マタ 26：28）。

(6) アブラハムへの約束を成就するために、神はモーセを選ばれた（出 3 章）。

- ①彼は、パロのところに行って、イスラエルの民の解放を要求した。
- ②パロは 10 の災害を経験した後、ようやくイスラエルの民の解放に同意した。
- ③モーセは、民に紅海を渡らせた。
- ④モーセは、イスラエルの民をひとつの国に作り上げようとした。
 - *彼は民に、律法を与えた。
 - *彼は、神を礼拝する方法を確立した。
 - *統治可能な組織を造った。

(7) しかし、モーセの仕事は途中で困難に遭遇した。

- ①契約の民としての歩みが始まるや否や、彼らは神の命令を破った。
 - 「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」（出 20：3）
 - 「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない」（出 20：4）
- ②山の麓では、民は金の子牛を作り、それを礼拝していた。
- ③モーセは民の罪を糾弾し、神に信頼するように民を励ました。

Ⅲ. トーラーには、明確な執筆目的がある。

1. イスラエルの民の状態

(1) 無知な民

- ①イスラエルの民は、自分たちが何者であるかを知る必要があった。
- ②彼らは、神が自分たちと契約を結ばれた目的を知る必要があった。

2. そこでモーセは、「イスラエルの子たち（children of Israel）」の歴史を書いた。

(1) 神に忠実なひとつの民を作り上げるため。

- ①自分たちがどういう民であるかを、彼らに教えるため。
 - *彼らは、先祖たちに与えられた約束（契約）の継承者である。
 - *彼らは、普通の民ではなく、契約の民である。
- ②なぜエジプトを出なければならなかったかを教えるため。
- ③人類救済計画を実行に移す民であることを教えるため。

(2) 神が求めておられるのは、完全な服従と信頼であることを教えるため。

- ①不信仰がもたらす危険性について警告するため。
 - *アダム、ノア、アブラハム、サラ、イサク、ヤコブなどの失敗例

3. 特にモーセは、神とは誰かを教えるために、神概念の解説に力を注いだ。

(1) 神は、宇宙の創造者である。

①トーラーは、天地創造の記事で始まる。

②モーセにとっては、シナイ契約の神は、創造主であり歴史の主である。

(2) 神の御名

①モーセをイスラエルの民のもとに遣わした神の名とは、何か。

*短い答えは、「わたしは、『わたしはある』という者である」(出3:14)。

*長い答えは、トーラーである。

4. 創世記はトーラーの一部である。著者の視点から見た創世記の主要テーマとは：

(1) 契約を結ぶ神は、人類の創造主である。

(2) イスラエルは、契約に基づく神の約束の継承者である。

(3) イスラエルは、神の約束に応答して生きることには失敗したが、それ以前にも、人類は同じような失敗を多く犯してきた。

(4) イスラエルの失敗にもかかわらず、神の約束は不変である。

*過去の失敗にもかかわらず、将来には希望がある。

5. トーラーが想定している読者

(1) イスラエルの民である。

①イスラエルの民は、普通の民ではない。

②イスラエルの民の歴史は、普通の歴史ではない。

③トーラーが物語る歴史は、神の民の贖いの歴史である。

④また、イスラエルの民を通してなされる全人類の贖いの歴史である。

(2) 約束の地に入る直前のイスラエルの民である。

①出エジプトの出来事も、シナイ契約も、過去のものとして語られる。

*過去の出来事は、イスラエルの民が学ぶべき教訓を多く含んでいる。

②モーセの視点は、将来に向けられている。

IV. トーラーには、明確な「構成上の戦略」がある。

1. 物語の構成を調べると、著者の意図がよく理解できるようになる。

(1) 全体としての調和

①部分と部分が相互に関連している。

②さらに、各部分が全体とつながっている。

(2) 物語を構成する要素

- ①イントロダクション
- ②結論
- ③つながり
- ④分断
- ⑤繰り返し
- ⑥省略
- ⑦描写
- ⑧会話

(3) 創 1：1～2：4a

- ①イントロダクション（1：1）
- ②本文（1：2～2：3）
- ③結論（2：4a）
- ④構成上の要素

- * 「タがあり、朝があった」の繰り返しにより、全体がつながっている。
 - ・ 創造物語が、7つの日に区分される（最終日は安息）。
- * 「and」の繰り返しにより、物語の進行が促されている。
 - ・ 日本語訳には訳出されていない。
- * 創 1：1 と 1：2 が分断されている。
 - ・ 分断は、モーセが採用する文学的手法である。
 - ・ それまでよりも狭いある特定の話題を取り上げる時の手法である。
 - ・ 創 1：1 は宇宙全体の創造、創 1：2～31 は土地の創造。

(4) 創 1：1～2：4a は、トーラー全体へのイントロダクションになっている。

- ①では、創 1：1～2：4a は、トーラーのどの要素の紹介となっているのか。
- ②創 1：1～2：4a とシナイ契約の関係を見逃してはならない。

2. トーラーで最も重要な出来事は、シナイ山における神とイスラエルの契約である。

(1) シナイ契約の中心テーマ

- ①神はイスラエルの間に宿るために下られる。
- ②イスラエルは選びの民である。
- ③神はイスラエルに土地をお与えになる。
- ④イスラエルは神の御心に従わねばならない。
- ⑤祝福か裁きは、神に従順であるかどうかにかかっている。

(2) 古代中近東の宗主権契約の形式が採用されている。

- ①神（偉大な王）は、忠実な民（臣下・王子）に、王の土地に住んでも良いという許可を与え、守りを約束する。
- ②これは、神政政治である。
- (3) シナイ契約についてモーセが伝えようとしたこと
 - ①全人類を祝福しようとする神の計画と、シナイ契約とが結びつけられる。
 - *シナイ契約は、アブラハムの子孫を通して全人類を救おうとする神の計画である。
 - ②シナイ契約では、全人類に対する神の祝福を回復することはできなかった。
 - *イスラエルが失敗したから。
 - ③しかし、全人類を祝福するという神の計画は、最終的には成就する。
 - *やがてイスラエルの民には、神に従う心が与えられる。
 - ④申 30：1～10 の預言

「あなたの神、【主】は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、【主】を愛し、それであなたが生きるようにされる」(申 30：6)

「あなたの神、【主】は、あなたのすべての手のわざや、あなたの身から生まれる者や、家畜の産むもの、地の産物を豊かに与えて、あなたを栄えさせよう。まことに、【主】は、あなたの先祖たちを喜ばれたように、再び、あなたを栄えさせて喜ばれる。これは、あなたが、あなたの神、【主】の御声に聞き従い、このみおしえの書にしるされている主の命令とおきてとを守り、心を尽くし、精神を尽くして、あなたの神、【主】に立ち返るからである」(申 30：9～10)

 - *トーラーの視点は、終末論的なものである。
 - *シナイ契約（過去）は失敗に終わった。
 - *しかし、アブラハムのような信仰を持てば、希望はある（将来）。
 - ⑤トーラーは、シナイ契約の失敗とそこから学ぶべき教訓を記した書である。
 - *ガラテヤ書で、パウロは同じテーマを扱っている。
 - *信仰による救い（福音）か、律法による救い（別の福音）か。

3. トーラーはシナイ契約に関する書であるが、シナイ契約の条項を記した書ではない。

- (1) もちろん、トーラーには、シナイ契約の条項そのものも含まれている。
 - ①十戒（出 20 章）
 - ②諸条項（出 21～23 章）
 - ③幕屋建設の命令（出 25～31 章）
 - ④いけにえの規定（レビ 1～7 章）
- (2) しかし、トーラーの目的はシナイ契約の有効性の評価である。
 - ①モーセは、シナイ契約の失敗を回顧している。

- ②さらに、シナイ契約が意図したことの成就を展望している（申 30 章）。
- ③旧約の他の歴史書、預言書、また新約聖書も、同じテーマを教えている。

4. イントロダクションとシナイ契約の関係

- (1) 創 1：1～2：4a は、トーラーのイントロダクションの部分である。

- ①イントロダクションの部分とシナイ契約の関係を見逃してはならない。

- (2) イントロダクションでは、「情報の厳選」という手法が使われている。

- ①天使たちの創造の記事がない。
 - ②星や星座の創造の記事がない（16 節は補足的説明である）。
 - ③著者の関心事は 3 つある。

- ・ 神
 - ・ 人間
 - ・ 土地

- ④太陽と月に関心が払われている。

「神は仰せられた。『光る物が天の大空であって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。』そのようになった」（創 1：14～15）

- ・ 人間の生活との関連で、それらが果たす役割に視点がある。

- (3) イントロダクションは、神が全地の所有者であることを示している。

- ①シナイ契約の中心条項のひとつは、土地を与えるという約束である。

「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである」（出 19：5～6）

- ②土地の所有者である神は、自分が選ぶ者にその土地を与えることができる。

*エレ 27：5

- (4) イントロダクションは、契約の神がどういうお方であることを示している。

- ①シナイ契約を結ぶ神は、宇宙の創造主である（創 1：1）。
 - ②この神を矮小化する危険性は常に付きまとっていた（ミカ 3：11）。

*この神を「イスラエルのためだけの神」とする危険性

- ③この神は全人類を救う計画を持った神である。
 - ④この神は、人類がそこに住むために土地を用意された。
 - ⑤この神は、全被造物を祝福しようとしておられる。

5. トーラーの結論は、申 30：1～10 である。

(1) イスラエルは反逆の民となり、神の裁きを受ける。

①しかし、神の計画は挫折しない。

(2) イスラエルは離散の地から約束の地に帰還する。

①イスラエルには新しい心が与えられ、彼らは神に従順な民となる。

(3) モーセの五書は、希望のメッセージをもって終わっている。

①エゼ 36：26～27

「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行わせる」

②ロマ 8：4

「それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした」

(4) 聖霊の働きの重要性

①創 1：2

「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた」

*聖霊への言及にどういう意味があるのか。

②出 31：1～5

「【主】はモーセに告げて仰せられた。『見よ。わたしは、ユダ部族のフルの子であるウリの子ベツアルエルを名ざして召し、彼に知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たした。それは、彼が、金や銀や青銅の細工を巧みに設計し、はめ込みの宝石を彫り、木を彫刻し、あらゆる仕事をするためである』」

*神の業を行うためには、聖霊の満たし（知恵）が必要である。

③民 11：29

「しかしモーセは彼に言った。『あなたは私のために思ってねたみを起こしているのか。【主】の民がみな、預言者となればよいのに。【主】が彼らの上にご自分の霊を与えられるとよいのに』」

*これが、著者モーセの聖霊に関する視点である。

V. トーラーは、メシアの到来と新約を指し示している。

1. トーラーとは、どのような本なのか。

(1) 2 種類の解釈

- ①物語を含んだ律法の書か？
- ②律法を含んだ物語の書か？

(2) トーラーは、律法を含んだ物語の書である。

- ①トーラーの構成は、文学的・終末論的なものである。

②引用 (Michael Fishbane, Biblical Interpretation in Ancient Israel, 91.)

「律法を研究する学者たちが昔から認識していることであるが、律法はその一部であれ全体であれ（出 21～23 章の律法、レビ 17～26 章の神聖法、申 12～26 章の律法）、それだけでは、律法の積極的な運用のために必要とされる諸分野を十分に取り扱っているとは言えない」

- ③トーラーは、律法による救いを教えているわけではない。

2. トーラーは、イスラエルがシナイ契約に違反することを予測している。

(1) アダムはイスラエルの象徴である。

①創 1～2 章

- *エデンの園（約束の地）
- *管理せよとの命令（征服せよとの命令）
- *エデン契約（シナイ契約）

②創 3 章

- *サタンの誘惑（「その地の住民」による欺き）
- *契約違反（シナイ契約違反）
- *エデンの園からの追放（国外追放）

(2) イスラエルがシナイ契約に違反するのは確実である。

「【主】はモーセに仰せられた。『あなたは間もなく、あなたの先祖たちとともに眠ろうとしている。この民は、入って行こうとしている地の、自分たちの中の、外国の神々を慕って淫行をしようとしている。この民がわたしを捨て、わたしがこの民と結んだわたしの契約を破るなら、その日、わたしの怒りはこの民に対して燃え上がり、わたしも彼らを捨て、わたしの顔を彼らから隠す。彼らが滅ぼし尽くされ、多くのわざわいと苦難が彼らに降りかかると、その日、この民は、『これらのわざわいが私たちに降りかかるのは、私たちのうちに、私たちの神がおられないからではないか』と言うであろう。彼らがほかの神々に移って行って行ったすべての悪のゆえに、わたしはその日、必ずわたしの顔を隠そう』」（申 31：16～18）

3. イントロダクションと結論に登場するイエツェル（悪への傾向）という概念

シナイ山以前	←	シナイ山	→	シナイ山以降
創 6：5、8：21				申 31：21
「心に計ること」				「たくらんでいる計画」

4. トーラーが提示する神学的解決法は、「心の割礼」（申 30：6）である。

「あなたの神、【主】は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、【主】を愛し、それであなたが生きるようにされる」

5. トーラーの中の「信仰のテーマ」

(1) 族長物語（信仰）（創 15：6）

「彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた」

(2) 出エジプトの物語（モーセへの応答）

「民は信じた。彼らは、【主】がイスラエル人を顧み、その苦しみをご覧になったことを聞いて、ひざまずいて礼拝した」（出 4：31）

「イスラエルは【主】がエジプトに行われたこの大いなる御力を見たので、民は【主】を恐れ、【主】とそのしもべモーセを信じた」（出 14：31）

(3) シナイ物語へのイントロ（信仰？）（出 19：9）

「すると、【主】はモーセに仰せられた。『見よ。わたしは濃い雲の中で、あなたに臨む。わたしがあなたと語るのを民が聞き、いつまでもあなたを信じるためである。』それからモーセは民のことばを【主】に告げた」

(4) 荒野の物語

①民（不信仰！）（民 14：11）

「【主】はモーセに仰せられた。『この民はいつまでわたしを侮めるのか。わたしがこの民の間で行ったすべてのしるしにもかかわらず、いつまでわたしを信じないのか』」

②モーセ（不信仰！）（民 20：12）

「しかし、【主】はモーセとアロンに言われた。『あなたがたはわたしを信ぜず、わたしをイスラエルの人々の前に聖なる者としなかった。それゆえ、あなたがたは、この集会を、わたしが彼らに与えた地に導き入れることはできない』」

③申命記（不信仰！）

「このようなことによってもまだ、あなたがたはあなたがたの神、【主】を信じていない」（申 1：32）

「【主】があなたがたをカデシュ・バルネアから送り出されるとき、『上って行って、わたしがあなたがたに与えている地を占領せよ』と言われたが、あなたがたは、あなたがたの神、【主】の命令に逆らい、主を信ぜず、その御声にも聞き従わなかった」（申

9：23)

6. トーラーの中の律法の役割（不信仰のゆえに律法が付加される）

- (1) 祭司の王国（出 19：5～6）

↓

祭司を有する王国

- (2) モーセはシナイ山で自分に与えられた召命を拒否した（出 4：13）。

↓

アロンの祭司制度が起こされた（出 4：14）。

- (3) 民はシナイ山で自らに与えられた召命を拒否した（出 20：18～21、32 章）。

↓

レビ的祭司制度が起こされた（出 32：26～29）。

- (4) スパイ物語（民 13～14 章）

「あなたがたの子どもたちは、この荒野で四十年の間羊を飼う者となり、あなたがたが死体となってこの荒野で倒れてしまうまで、あなたがたの背信の罪を負わなければならない。あなたがたが、かの地を探った日数は四十日であった。その一日を一年と数えて、四十年の間あなたがたは自分の咎を負わなければならない。こうしてわたしへの反抗が何かを思い知ろう」（民 14：33～34）

＊「tur（探る）」（民 14：34）

＊「whoredom（背信の罪）」（民 14：33）

↓

律法の追加（民 15 章）（着物のすその 4 隅に付けるふさ）

「イスラエル人に告げて、彼らが代々にわたり、着物のすその四隅にふさを作り、その隅のふさに青いひもをつけるように言え。そのふさはあなたがたのためであって、あなたがたがそれを見て、【主】のすべての命令を思い起こし、それを行うため、みだらなことをしてきた自分の心と目に従って歩まないようにするため、こうしてあなたがたが、わたしのすべての命令を思い起こして、これを行い、あなたがたの神の聖なるものとなるためである。わたしはあなたがたの神、【主】であって、わたしがあなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から連れ出したのである。わたしは、あなたがたの神、【主】である」（民 15：38～40）

＊「tur（従う）」（民 15：39）

＊「whoredom（みだらなこと）」（民 15：39）

↓

コラによるモーセへの反逆物語（民 16 章）

(5) レビ 9 章

「それから、アロンは民に向かって両手を上げ、彼らを祝福し、罪のためのいけにえ、全焼のいけにえ、和解のいけにえをささげてから降りて来た。ついでモーセとアロンは会見の天幕に入り、それから出て来ると、民を祝福した。すると【主】の栄光が民全体に現れ、【主】の前から火が出て来て、祭壇の上の全焼のいけにえと脂肪とを焼き尽くしたので、民はみな、これを見て、叫び、ひれ伏した」(レビ 9：22～24)

＊「いけにえを焼き尽くした」(9：24)

↓

レビ 10 章 (祭司ナダブとアビフの違反)

「さて、アロンの子ナダブとアビフは、おのこの自分の火皿を取り、その中に火を入れ、その上に香を盛り、主が彼らに命じなかった異なった火を【主】の前にささげた。すると、【主】の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、彼らは【主】の前で死んだ」(レビ 10：1～2)

＊「捧げる人たちを焼き尽くした」(10：2)

「モーセは罪のためのいけにえのやぎをけんめいに捜した。しかし、もう、焼かれてしまっていた。すると、モーセはアロンの子で生き残ったエルアザルとイタマルに怒って言った。『どうして、あなたがたは聖なる所でその罪のためのいけにえを食べなかったのか。それは最も聖なるものなのだ。それは、会衆の咎を除き、【主】の前で彼らのために贖いをするために、あなたがたに賜ったのだ。その血は、聖所の中に携え入れられなかったではないか。あなたがたは、私が命じたように、それを聖所で食べなければならなかったのだ』」(レビ 10：16～18)

＊「どうして食べなかったのか」(10：16～19)

↓

レビ 11 章 (清いものと汚れたものに関する規定)

＊「食べてよいもの」と「食べてはならないもの」について

7. 創 3 章の構成とトーラー全体の構成

(1) 物語

創 3：1～13

創 1 章～申 31 章 (失敗の歴史)

(2) 韻文による詩

創 3：14～19

申 32～33 章 (モーセの歌)

(3) エピローグ

創 3：20～24

申 34 章 (モーセの死)

8. 詩的継ぎ目に着目

＊引用 (John Sailhamer, The Pentateuch as Narrative, 36)

モーセの五書を大局的に眺めると、3つの大きな接合点がある。著者は、そのすべての接合点で、長い物語の後に韻文による重要なメッセージを配置している（創 49 章、民 24 章、申 32～33 章）。物語部分と韻文の間にあって両者をつないでいる要素をさらに詳細に観察すると、そこにひとつの共通した構成上の「層」があることに気づく。その「層」とは、同じ言葉とモチーフが繰り返されるということである。3つの接合点のすべてにおいて、中心人物（ヤコブ、バラム、モーセ）は聴衆を呼び寄せ（命令形。創 49：1、民 24：14、申 31：28）、将来の出来事を宣言している（ヘブル語文法の奨励形。創 49：1、民 24：14、申 31：28）。それは、「終わりの日」に起こることである（創 49：1、民 24：14、申 31：29）。

(1) 創 49：1、8 以降

「終わりの日」「統治者の杖」

(2) 民 24：14、17

「後の日」「一本の杖」

(3) 申 31：29、33：7

「後の日」「その民に、彼を連れ返してください」

9. 共通した構成上の層

(1) 希望の柱：ヤコブとモーセ

①死を目前にしたヤコブの祝福（創 49 章）

②死を目前にしたモーセの祝福（申 33 章）

(2) 共通した要素

①両者は、離散の地で死のうとしている。

②両者は、イスラエルの 12 部族を祝福する。

③両者は、「聖霊に満たされた」後継者を任命する。

④両者は、終わりの時に現れる勝利の王について預言する。

10. 2つの異なった解釈法

(1) もしトーラーを「律法の書」として読めば、結果は、タルムードである。

①ミシュナ + ゲマラ = タルムード

(2) もしトーラーを「物語の書」として読めば、結果は、新約聖書である。

①トーラーで語られていた希望の成就

(3) トーラーの構成上の戦略

- ①人類が持つ罪の性質に関しては、悲観的現実主義である。
- ②イスラエルと諸国に対する神の約束は必ず成就するという、預言的期待がある。

(4) この約束は、

- ①来たるべき王と、
- ②新約を通して、成就する。

11. 新約聖書によるトーラーの解釈

(1) イエスによる解釈

「わたしが、父の前にあなたがたを訴えようとしていると思ってはなりません。あなたがたを訴える者は、あなたがたが望みをおいているモーセです。もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことからです。しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう」(ヨハ5:45~47)

(2) パウロによるトーラーの解釈

「兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いています。しかし、信仰による義はこう言います。『あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない。』それはキリストを引き降ろすことです。また、『だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけない。』それはキリストを死者の中から引き上げることです。では、どう言っていますか。『みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。』これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです」(ロマ10:1~9)



無断複製・転載を禁じます